【書　評】

神奈川大学人文学研究所（編）

『笑いのコスモロジー』

笑いのシュムポシオン

磯　谷　　孝（東京外国語大学教授）

笑いとは生・存在のホメオスターシス，あるいは崩れたバランスの回復作用をもった心身論的現象だが，最近では，ノーマン・カズンズ以来の笑いの癒し論と並んで，笑いは人間存在とその文化の解明に積極的な意義をもつものとして位置づけられるようになった。これまで哲学・思想史のなかで副次的にしか言及されなかった笑いの思想が全面に引き出されたのである。かくして笑いの文献は着実に数をふやしつつあるが，本書も「笑い」論の営みへの貴重な寄与に思われる。

その特色は，笑い論の理論的な深さと同時にその射程の広さ，多様性にある。一人の著者が一巻の書物を費して論じることによって生じる深みも得がたいが，九人もの研究者たちがそれぞれゆたかな人世経験と学識を踏まえつつ，その専門的守備範囲で笑いを論じるとなると，相当なものが期待されよう。全体は二部に分かれ，第一部が理論篇をうたっているのに対し，第二部は分野・領域別笑い論なのだが，実際は，第二部もしっかりした理論的思考に裏づけられているし，第一部も現実の笑いの現象が適切に取りあげられ，理論の検証に役立てられている。

笑いを人間のコミュニケーションという大枠のなかで考えようとする小馬　徹氏の「笑い殺す神の論理—笑いの「反記号論」」は本書の理論的な出発点をなすものである。氏によれば，笑いはコミュニケーションの断層化とディスコミュニケーションの相関によって成立つ。それは既存の秩序を無化しコミュニケーションを再生させる，という。バルイェットその他の民話の分析も興味深い。

これに対し湯田　豊氏は笑いをニーチェの思索の道程の極・頂点として跡づける。超人の思想によれば，人間の仕合わせ・笑いを排除する厳粛なイエスには真の愛が欠けている。この重さの精神，「小さな人間」，自己自身を笑いによって克服し超人とならなければならないのだが，そういうニーチェが心底自然に笑っているようには思われない。

百々佑利子氏は人間における言葉の能力の発生と成長に眠らせ歌，子守歌，遊びの歌，子供のための創作詩，替え歌等を重ね合わせながら，笑いとナンセンスを考察している。言葉を知らぬ幼児の笑いは無垢の笑いである。眠らせ歌のナンセンスはもっぱら音調の快さによって眠りを誘発するのだが，言葉の能力の出現とともに言葉遊びとしてのナンセンスが生じる。時に毒のある笑いを含んだこの言葉遊びによって子供の可能性が開発されるが，やがて，人間的自由が達せられ，実存的選択に直面するとき，そこにあるのは「永却回帰」であり，ニーチェの笑いなのではないか。

ロシアの笑いは猥雑だが，時にはこのほうが救いになる。ロシアの笑いのみならず，一般に笑いの文化・社会的，実存的本質を明らかにしたのはミハイル・バフチーンのカーニバルの思想である。カーニバルの笑いは反抗的な笑いであり，この笑いによって，権威の奪冠と抑圧されたもの，俗なるものの戴冠，万物の死と再生が執り行われる。バフチーンは西欧中世・ルネッサンス期のカーニバルを検討の対象にしているが，その背景には，おどけ芸人，瘋癲行者に代表されるロシアの笑いの伝統もある。それはロシア文学やアネクドートのなかにもしたたかに流れ込んでいる。中本信幸氏の論稿は要を得たロシアの笑い総覧となっている。

マンガや「お笑い」はジャンルとして制度化された笑いの文化である。古岩井嘉蓉子氏は日本の四コマ・マンガの構造を綿密に分析し，その笑いは，「人々が生活している時代のダイナミックな動きの中から生れる一種の車座社会の産物」という。ストーリイの劇的展開・機知・意外性の追求が際立つ欧米の四コマ・マンガとは似て非なるもの，なのであろう。「お笑い」文化もまた日本独特だが，寺澤正晴氏は笑いに関する先行理論を概観のうえ修正論を提示し，戦後日本の笑いの変遷をたどっている。消費社会では笑いも消費の対象とされ，退落する。このことが笑いについての反省を促すのである。

文学の笑いをジャンル化したものが喜劇や諷刺小説であるが，倉田　清氏のモリエール論は喜劇を悲劇と並ぶ位置に高めたモリエール戯曲における笑いと批判のエッセンスを披露する。モリエールの読み方を教えられた思いである。マーク・トゥエインは多様なユーモアによる笑いの創造をとおしてアメリカ文学を確立したが，金谷良夫氏は彼のユーモアと笑いの本質を明らかにする。そこで示されるのは，批判的精神こそ散文の精神，ということなのではないか。復本一郎氏は，滑稽なもの，俗なものと崇高・高雅なものとの拮抗・両立において自由で深みのある俳諧の言葉が生み出されたことを明らかにしている。このことはモリエール，マーク・トゥエインの仕事にも，また，一般に標準文章語の形成という問題にも通じることなのである。

九人の研究者たちによる笑い論の共創造――さわやかで快い。